



Data

監督：根岸吉太郎
 原作：太宰治『ヴィヨンの妻』（新潮文庫刊）
 出演：松たか子 / 浅野忠信 / 伊武雅刀 / 室井滋 / 広末涼子 / 妻夫木聡 / 堤真一

👁️👁️ みどころ

太宰治生誕百年を迎えた今年、その映画化ラッシュの中で根岸吉太郎監督がモントリオール国際映画祭で最優秀監督賞を受賞！太宰治といえば自殺、自殺といえば太宰治。そしてそもそも、太宰文学は敗北の文学？ところが、本作のテーマは「暗いだけじゃない」らしい。夫とは対照的な、松たか子演ずるヴィヨンの妻（＝太宰治の妻）の生きざまとは？ちなみに、本作ではタイトルの他、意味シンのサブタイトルにも注目を。



根岸吉太郎監督おめでとう！

2009年9月7日、日本の映画界に嬉しいニュースが飛び込んできた。それは、2009年8月27日から9月7日までカナダで開催された第33回モントリオール世界映画祭で、根岸吉太郎監督が最優秀監督賞を受賞したというニュースだ。今年は第62回カンヌ国際映画祭で是枝裕和監督の『空気人形』（09年）がダメ、第66回ベネチア国際映画祭で塚本晋也監督の『TETSUO THE BULLET MAN』（09年）がダメだったから、これはビッグニュース。ちなみに私は、秋吉久美子主演の『ひとひらの雪』（85年）で根岸吉太郎監督の名前を覚えたが、近時の彼の印象的な作品は『透光の樹』（04年）（『シネマルーム6』339頁参照）と、『雪に願うこと』（05年）（『シネマルーム11』81頁参照）。

根岸監督は最優秀監督賞受賞の喜びを「日本の繊細な文化、生活感とかが認めてもらえたのがうれしい。これは個人賞ではなく、日本人みんなに与えられた賞。日本映画界の喜びとして受け止めている。ぜひ多くの人に見ていただきたい。」と述べているが、2008

年の第81回アカデミー賞で外国語映画賞を受賞する前にモンリオール世界映画祭でグランプリを受賞した滝田洋二郎監督の『おくりびと』(08年)に続くモンリオールでの快挙は立派なもの。「政権交代」によって没落していくことが決定的となった(?)自民党と同じように、日本国も没落していくものと私は思っているが、そんな悲観的な流れの一曲マにおける根岸監督の快挙に拍手!

なぜ太宰治が? 『蟹工船』ブームとの異同は?

今年2009年は、太宰治生誕百年という記念すべき年。しかし、いくらそうだとしても『斜陽』『パンドラの匣』『人間失格』そして本作と太宰作品が4作も同時期に映画化されるのは、少し異常? コリャ派遣切り、貧困と格差の拡大が続く中、プロレタリア文学の金字塔である小林多喜二の『蟹工船』が脚光を浴び、SABU監督の『蟹工船』(09年)が完成したのと同じ現象?

そもそも太宰治の最も有名な小説『人間失格』は、戦後の日本共産党を長年にわたって指導してきた政治家宮本顕治が東大在学中に「敗北の文学」と批判したものの。その論旨がどこまで正当か否かは別として、太宰といえば自殺、自殺といえば太宰と直結してしまうから、太宰は決して前向きな小説(家)と言えないことは明らかだ。小林多喜二が書いた『蟹工船』は、資本家(階級)によって、オホーツク沖へ出航した蟹工船に乗った労働者(階級)が立ち上がるけれども押しつぶされてしまう物語だが、最後の「そして、彼等は、立ち上がった。もう一度!」との文章が印象的で、前向きな姿勢(?)が救い? その点、太宰作品は?

本作は太宰治の短編『ヴィヨンの妻』に他のいくつかの短編と脚本家田中陽造の世界を足して書いてもらったもので、浅野忠信演ずる小説家大谷のモデルはもちろん太宰治その人。しかし9月13日付大阪日日新聞における根岸監督のインタビューの見出しは、「テーマは『暗い』だけじゃない」。なるほど、なるほど。コリャ是非『蟹工船』と対比しながら、明るい前向きな太宰文学を映像から探してみなければ・・・。

浅野忠信の変身ぶりにビックリ!

本作のメインタイトルのヴィヨンとは何? よほどの太宰ファンならともかく、テレビはバラエティーしか見ておらず、本はケータイ小説しか読んでいない若者たちには、まずそれがわからないはず。ヴィヨンとは15世紀のフランスの詩人で、最初の近代詩人とも呼ばれるフランソワ・ヴィヨンのこと。小説家や詩人には変人・奇人が多いが、このヴィヨンはその典型で、高い学識を持ちながら悪事に加わり、逃亡・入獄・放浪の生活を送った人物。私たちがよく知っている19世紀のフランスの早熟の天才詩人アルチュール・ランボーも家出をくり返した放浪児だったが、ヴィヨンは前科数犯のれっきとした犯罪者だ。そんな予備知識がなくとも、本作に登場する小説家大谷の冒頭のエピソードと、椿屋の主

人吉蔵（伊武雅刀）とその妻巳代（室井滋）が語る大谷の人物像をみれば、ヴィヨンこと大谷の変人・奇人ぶりがわかつろうというものだ。

他方、本題のタイトルも意味シン（？）だが、サブタイトルの「桜桃とタンポポ」も意味シン。だって、タンポポはともかく、桜桃って一体ナニ？私を含めて、それ自体がわからない若者が多いはずだ。このサブタイトルは、踏みつけられても死なない強い花タンポポ（＝松たか子演ずる妻の佐知）と、傷みやすいけれど甘みがあって愛される桜桃、つまり浅野忠信演ずる大谷を象徴するものだ。

第80回アカデミー賞外国語映画賞ノミネートで大きな話題を呼んだ『モンゴル』（07年）で浅野は圧倒的な存在感を示し（『シネマルーム19』150頁参照）さらに『劔岳 点の記』（09年）でも任務に邁進する明治の気骨ある男の心意気を示した（『シネマルーム22』250頁参照）が、逆に『鈍獣』（09年）での浅野は最悪だった。本作における浅野の演技は、あえて言えば『母べえ』（08年）の山崎徹役に近いかもしれない（『シネマルーム18』236頁参照）が、太宰治のような繊細な神経を持った小説家大谷を見事に演じた浅野の演技力に拍手。それにしても、近時のそれぞれの作品における浅野の変身ぶりにビックリ！



2009 フジテレビジョン パパドゥ 新潮社 日本映画衛星放送
全国東宝系にて公開中

昔の女は、26歳でこんなにしっかり？

いつも「死にたい」と言っている、才能はありながら生活破綻者の小説家大谷の妻佐知は、大谷の4歳年下で今26歳。大谷が椿屋から5000円という大金を盗んできたことに伴うドタバタ劇から始まる本作は、あくまで大谷に尽くす女佐知と、お金を返すために椿屋で働き始め、「私ってお金になるのね」と自我に目覚めていく女佐知を、多くの視点から興味深く描いていく。

大谷と佐知の間には2歳の男の子もいるから生活が大変なことは明らかだが、26歳にしてどんな苦境も乗り越えていけると信じ、行動している佐知の生きざまはしなやかで力強い。勤務1日目にして椿屋の看板娘(?)となった佐知なら、大谷が盗んだ金5000円と大谷の未払い金となっている累積飲み代2万円の返済くらいはすぐ？昔の女がみんな佐知のようにしっかりしていたわけではないだろうが、敗戦直後の昭和21年12月から始まる本作の物語で26歳にして佐知がこんなにしっかりしていることにビックリ。

両親の助けを借りて婚カツに精を出さなければならない今ドキの26歳の女性は、本作を観てあらためて女の生き方を考え直す必要があるのでは？

心中ってそんなに難しいの？

『おくりびと』が第32回モンテリオール世界映画祭でグランプリを受賞したため、がぜん株を上げたのが広末涼子。そんな彼女が大谷に貢ぎ続け、今やバーの女給にまで落ちぶれ果てた大谷の愛人秋子を演じている。本作で根岸監督が第33回モンテリオール世界映画祭で最優秀監督賞を受賞したから、広末はよほどモンテリオール世界映画祭の神サマに好かれているようだ。

佐知の浮気(?)に絶望した大谷をいつものように迎え入れた秋子が、あっさり心中の申し込みに同意したのは当然だが、心中ってそんなに難しいの？寺島しのぶが主演した荒戸源次郎監督の『赤目四十八瀧心中未遂』(03年)ではたしかに心中は難しく未遂に終わった(『シネマルーム4』158頁参照)が、渡辺淳一の『失楽園』(97年)ではワインと睡眠薬によってあっさり心中は完成していた。そりゃ睡眠薬を大量に買いつけること自体が難しいことはわかるが、2人だけでこっそり人目に触れない所で睡眠薬自殺を実行しようとするれば、本作にみるようなドタバタ劇にならずとも完成するのでは？そう言ってしまう身も蓋もないが、悲劇のような喜劇のような大谷と秋子の心中実行シーンは本作の1つのハイライトだから、それに注目したい。

大谷は浮気者だが、佐知だって？

本作で面白いのは、大谷と佐知の会話が丁寧語であること。なぜそうなのか？は脚本を書いた田中陽造氏と根岸監督に聞くしかないが、ひょっとしてこれがモンテリオール世界映画祭で最優秀監督賞を受賞した1つの理由？

それはともかく、大谷が妻の佐知に語る言葉の中で最も印象的なのは「女には、幸福も不幸もないのです。男には不幸だけがあるのです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです」というもの。もちろん、佐知はその言葉の深い意味を理解できないはずだし、私にもよくわからないが、何となくすごい言葉では？他方、大谷の妻として不幸ばかりだった佐知の人生に幸福な局面が生まれてきたのは、佐知が精屋で働き始めてから。だって、精屋への出勤を始めたことによって若い工員岡田（妻夫木聡）から一目ボレされたし、岡田と最終電車（？）で帰路につく時、かつての憧れの男性で今は銀座で弁護士事務所を開いている弁護士の辻（堤真一）とも出会うことができたのだから。本作の時代は昭和21年12月だから今から60年以上も前の物語だが、こりゃ家庭の主婦としてつつまじやかな生活をしていた女性が銀座のバーに勤め始めた途端、急に男関係が広がっていくようなもの？貧しい家の娘だった佐知がかつて辻を想うばかりに引き起こした「万引き事件」が、人間関係を紐解く1つのキーストーリーになるから、佐知と辻の数年ぶりの再会をきっかけとして起こる男と女のドラマに注目。さらに、NHK大河ドラマ『天地人』でついに石田三成と組んで家康との対決の道を選んだのが妻夫木聡演ずる直江兼続だが、その妻夫木聡はえらく純情な工員役で本作に登場。自分の浮気には寛容なくせに、妻の浮気は許せないのが大方の男。そして大谷も当然その一員。したがって「お前最近えらくキレイに、色っぽくなったな」と語りかける大谷の姿はそんな男のエゴ丸出したが、その後の私立探偵まがいの追跡の結果明らかになった佐知の浮気とは？

こりゃ松たか子の代表作に？

近時松たか子は『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（07年）（『シネマルーム13』272頁参照）『HERO』（07年）（『シネマルーム16』151頁参照）『K-20 怪人二十面相・伝』（08年）などで堅実な演技をみせ、それなりの存在感を示しているが、和服姿が似合う女優としての存在感を増したのは『隠し剣 鬼の爪』（04年）以来。もっとも私は、『隠し剣』の永瀬正敏・松たか子コンビと『たそがれ清兵衛』（02年）の真田広之・宮沢りえコンビを比較して、「どちらがよりインパクトがあり、どちらがより魅力的かといえば、『隠し剣 鬼の爪』のお2人には失礼ながら、そりゃ決まっている……？」と書いた（『シネマルーム6』189頁参照）が、本作における松たか子の和服姿は実にピッタリ。

秋吉久美子の「艶技」に生ツバを飲み込んだ『透光の樹』のような色気シーンはないが、本作で見せるそこはかとない松たか子の色気も相当なもの。これくらいフェロモンが漂っていれば、精屋に酒を飲みに来る客はもちろん、岡田から一目ボレされたり、銀行の頭取の娘と見合いをしたという辻からあらためて見直されたのは当然だ。本作は根岸監督の最優秀監督賞受賞と相まって、女優松たか子の代表作になるのでは？

2009（平成21）年9月16日記